

『甘えたくても甘えられない』を拝読して

今回は出席できなくてとても残念です（飲み会も含めて）。そこで、身代わりにわたしの感想をお送りして、参加にかえさせていただきますよう。

小林先生の今度の本は、自閉症スペクトラムを土居健郎の「甘え」からとらえたもので、一貫して「関係relationship」の視点から自閉症を追究してこられた先生の研究が「ああ、この地点へたどりついたのか」というのが第一の感想です。一つの結節点ですね。

「甘え」はおとなと子どもの中に必ず生起し、それを導きの糸に子どもは育ってゆきます。これは子どもの生存と成長において重要かつ普遍的な現象で、自閉症においては、そこはどうか。一見、甘えなかったり、甘えを知らないかに見えるこの子どもたちにも「甘え」の心性はあり、しかもそれがかれらの自閉症的とみられる行動にまさに現れているのではあるまいか。これが、本書での小林先生のオリジナルな着眼ですね。SSPで、子どもだけでなく親の行動も観察して両者を照合するという方法を通して、そこに至ったのだとわかります。

小林先生は昔から自閉症脳障害説を批判されてきましたね。ひとつの理由はエビデンスが不十分な仮説だからです（脳障害と言いつつ脳の所見を診断基準に盛り込めない事実が、その仮説性を示しています）。仮説だから悪いわけではなく、仮説にもかかわらず「定説」として流通されているところに非科学性があります。

しかし、それ以上に、脳障害説がこの子どもたちを異質な存在として特殊化してしまうところに小林先生の批判があると思います。この特殊化からは、「甘え」をキーワードに自閉症を考えるなんて発想は出てこないでしょうね。「甘え」などという正常心理から「障害」である自閉症を語るのナンセンスとされるのが関の山でしょうか。自閉症とは、脳の障害による（正常では起きない）「特殊な現象」であらねばならぬからです。この子どもたちの行動の多くが「障害特性」という説明で済まされるところにも、特殊化がいかに働いているかがみてとれるでしょう。

この特殊化に対して、小林先生は異を唱えているわけですね。「自閉症といわれる子どもたちも親へ甘えを求めている、だって成長途上の子どもなんだもの。どんな子どもであっても、おとなに甘えて、その甘えが受けとめられることは不可欠で、まして育ちなやんでいるがゆえに〈発達障害〉とされるかれらには、これはいっそう切実なことなんだ。SSPでこの子どもたちと親との間の相互反応を観察すれば、そこがありありと見えるじゃないか」。この本の主張をひとことでまとめれば、こうなろうかと存じます。

小林先生の三つ目の批判は、脳障害説は問題を「個」に還元してしまうことです。人間の精神現象はかならず他者との相互作用のなかで生起し、関係性・共同性のなかではじめて成りたつ現象にもかかわらず、あたかも個人の内部で起承転結している現象かのようにとらえる人間観への批判ですね。

実はこの批判、土居健郎が甘え理論によって従来 of 精神分析学へ向けた批判とまさに重なります。フロイトにはじまる自我心理学は「心的装置」のモデルに窺われるごとく、基本的には（無意識領域も含めた）個人内部におけるエス、自我、超自我の力動としてこころの働きとその失調をとらえるものです。その背景には「自立的個人」という西欧近代の人間観があります。自立した個人と個人との契約から社会（人間関係）はなりたっているとする考え方ですね。そこでは精神現象は可及的にその自立的個人の内面（あるいは脳内）の現象として扱われます。その意味では、サイコロジカルな精神分析学とバイオロジカルな脳科学とは、相反的にみえながら基底の人間観は共通です。根は同じ。

これと対比すれば甘え理論は、人間とは自立した個人ではありえぬ存在で、そのような人と人との相互依存から社会（人間関係）はなりたっているという考え方になりますね。「契約」が知的・規範的なものとすれば、「依存」は情緒的・生活的なもので、その情緒の複雑微妙な綾を土居は「甘

え」の概念でとらえたといえます。もちろんこれは、人間が一方でもつ「個人性（内面性）」を否定するものではなく、土居はその問題を「秘密」というキーワードで扱っていますね。

西欧近代的な人間観では、依存よりも自立、情緒よりも知性がずっと上位におかれます（等分にとらえる観点がない）。「自立性」と「知性」にこそ自分たち人間のあるべき本質をみようとしませう。その欧米の精神医学が主導してきた（日本の研究者も追随してきた）自閉症研究は、基本的にこの人間観に立っていますね（カナーが「情緒的交流の障害」と捉えたものがラターの「認知の障害」にとってかわられて学界を席卷したのもそのあらわれ）。この人間観からは「関係」という視点は乏しくなります。「甘え」という依存的・情緒的なところの働きに目を向けることで、そうした自閉症研究（自閉症理解）を乗り越えんとしているのが、現在の小林先生の取り組みだと思いました。

「甘えたい」「甘えたくても甘えられない」「甘えたいけど甘えたくない」といった「甘え」をめぐる諸心理は子どもたちが成長のプロセスで必然的に体験する普遍的な現象で、当然、自閉症の子どもたちも体験していると言えます。しかし、これを裏返せば、自閉症とかぎらずどんな子どもも体験するこの心理が、その子がまさに自閉症と呼ばれる状態にあることにどうつながっているのか、という問いが生じます。そこをどう考えるか。ここは、まだ未整理な印象を受けました。次の本で、ということかもしれません。

この問題は、小林先生がかつて「接近回避動因葛藤」の概念で、その後は「アンビバレンス」の概念で追究してこられたテーマにつながっていますね。「甘え」を巡って子どもたち一般がであろうアンビバレンスの構造は一通りではなく、いろいろな構造がありえます。また、小林先生の指摘のとおり、アンビバレンス（葛藤）なくして成長（精神発達）はありえません。さて、そこにおいて、自閉症の子どもがぶつかる「甘えのアンビバレンス」とはどんな構造をもったものだろうか。言い換えれば、「甘えたい」と「甘えられない」との間には何がどう挟まっているのだろうか。そこが追究のポイントになるかと思えます。「甘え」という関係的な現象を、フロイトの小児性愛やボールビィのアタッチメント等との関連も含め、あらためて精神発達論のパースペクティブで掘り下げる仕事にもつながりそうですね。これからの小林先生の展開が楽しみです。

それでは会のディスカッションが実り多きものとなることをお祈り申し上げます。

2014. 12. 19. 滝川一廣